

第十五章 聖霊なる神・降臨

ペンテコステの日に御霊がこの世に来られたことは、それ以前の聖約期における御霊の働きとの関連において見られるべきである。旧約聖書では遍在の神として御霊はこの世におられた。にもかかわらず、ペンテコステにおいてこの世に来られたといわれ、現在は世にとどまっており、携挙の時に世から去られるという。聖霊について学ぶとき、この世とのさまざまな関係を学ぶべきである。

I 旧約聖書における聖霊

キリスト初臨以前の長い期間中、御霊はいまどこにでも存在しておられるのと同じ意味で、この世に存在しておられた。そして、みこころのままに、神の民の中に、また、彼らを通して働かれた。(創世 41:38、出エジ 35:31、ゼカ 4:6 等) 旧約聖書で御霊は、創造の業にかかわり、真理を啓示する役目を果たし、靈感を与えて聖書を書かせ、世の罪を抑制し、信者のために奉仕の力を与え、奇跡を行うなどの働きをなされた。しかし、現在のようにすべての信者の内住したという証拠は無い。同じく、ペンテコステ以前に御霊の証印や、御霊のバプテスマのことは語られていない。したがって、ペンテコステの後には、それ以前の時代よりも大きな御霊の働きがあることが期待される。

II キリストの地上生涯の間の聖霊

1、キリストとの関係において、御霊は神一人イエスが処女の胎内に形成されるのを始動させた力であった。(ルカ 1:35) キリストのバプテスマの際に、御霊が鳩のように降りて来た。(マタ 3:16 他) さらにキリストがご自身を捧げたのは、永遠の御霊によることが明らかである。(ヘブ 9:14)

2、キリストの地上における活動の間、御霊と人間との関係は漸進的であった。キリストはまず弟子たちに、御霊は求めるなら与えられる(ルカ 11:13) という確証をお与えになった。(それ以前の時代は、神の一方的なご意志によって御霊が下った。) 地上生涯を終えられる直前に、御霊を送る約束をなされた。(ヨハネ 14:16、17) また、「御霊を受けなさい」と言われたが(ヨハネ 20:22)、弟子たちは上からの永続的な力を受けるまでは、エルサレムにとどまっていなければならなかった。(ルカ 24:49、使徒 1:4)

III ペンテコステの際の聖霊降臨

父と御子との約束の御霊が、ペンテコステにおいて世に下った。御霊は遍在のお方であるが、この日、世をその住みかとなさったと理解するとよい。(御父は遍在であるが、その住みかは天。御子は遍在であるが、その住みかは神の右の座である。)

聖霊は現在においてさまざまな働きをもっておられる。第一にヨハネ 16:7-11 に記されているように、三つの教理についての誤りを認めさせることである。

1、罪についての誤り。

キリストを信じないことが、彼を救いから遠ざけている何よりの罪である。(ヨハネ 3:18)

2、義についての誤り。

キリストの地上生涯は、神の義の生きた例証であった。御霊は人に神の義を示される。神の要求される義は、人の力の及ぶ範囲をはるかに超えている。人はキリストを信じて、彼の義をまとう以外に神の義を全うする方法は無い。(ローマ1：16-17、3：22、4：5)

3、さばきについての誤り。

サタンは十字架において既にさばかれているという事実。これは十字架上の御業は完了したものであり、さばきは既になされ、サタンは敗北を喫し、キリストに信頼をおく者たちは救いを得ることができるという事実を明らかにする。

ペンテコステ以前にも聖霊は働いておられた。しかし、ペンテコステにおいて聖霊が下られたことで、教会における聖霊の働きは多くの新しい面をもつようになった。新生、内住、証印、バプテスマなどで、これらについては後の章で考察していく。